

環境教育センター活動報告

環境教育センター担当 野村宗嗣

環境教育センターでは、活動の一環として自然環境を学びのベースとした活動を設定し、幼児・児童・生徒と教職や保育職をめざす学生の学びというものを育めるよう、センターでの活動を進めてきています。

以下に、今年度の活動から、「大学探検」と「親子防災キャンプ」の活動を報告します。

1. 「大学探検」

環境教育センターでは、過年度より四季に応じた自然環境での学びというものを主体に活動内容を考えてきました。そのような経過から、今年度は冬の季節の活動として「大学探検」という活動を行いました。関係園の園児が大学校内を探検し、冬の学習林で、どんぐりや木から落ちた葉っぱといった秋のなごりをさがし、それに色づけして版画にするという活動です。

今回は、普段より環境教育センターの活動に参加している学生に加え、環境に関する授業を受講する学生も活動に参加したこともあり、2日間の日程で行いました。両日で園児50人あまり、学生も50人あまりの参加となり、園児さん学生ともども、にぎやかに活動を堪能することができた様子です。

当日は、スクールバスから降りてきた園児を、学生が元気に出迎えることから始まりました。集団での移動や持ってきたもののかたづけ、グループごとの着席といったことが規律正しく進む園児さんの様子から、集団で日々習慣づけられた生活というものの大切さと成果というものを、参加学生は学ぶことができたと考えます。また、集団から離れそうな子どもへの声かけや、「次は何するのかな」といった保育士さんの状況に応じた言葉かけから、「ニーズに応じた教育」というもののあり方の実際に参加学生は学んだと考えます。

「大学探検」の活動としては、大学の学習林や

周辺の芝生の斜面から、落ちている葉っぱやどんぐりを拾い、画用紙の上に並べて思い思いに色づけし、半紙をかぶせて版画にするというものです。一連の活動を通して、園児が自分たちの集めた秋のなごりに色づけすることや、それが版画となり映し出された作品から、版画にする前の素材からとは、またちがった感覚や印象を園児が感じ取ったと考えます。

活動に参加した学生は、たくさんの子どもにかかわり、たくさんやりとりが体験できた様子です。言葉のやりとりだけでなく、視線や動作でのやりとりもできた様子でした。園児と同じ目の高さで事象をとらえ、同じペースで動くことで、参加学生は子どもというものの理解を深めていった様子でもあります。学生も、一度は子どもたちと同様の発達の過程を過ごしているはずですが、大人になってしまうと、なかなか子どもの時の記憶や感覚は消えてしまっているということがあります。参加学生には、園児と同じ視点で、そして同じペースで活動をすることで、より子どもという存在を理解していってこれればというところからです。

参加学生の様子を見ていると、子どものペースにとまどっている学生や、自分のペースで動いてしまっている学生もいる様子でした。そんな学生たちも子どもたちと一緒に見たり聞いたり話したりする中でたのしんで一緒に活動ができていた様子です。子どもと同じ視線で景色や事象を見たり、同じペースで動いたりすることで、子どもたちが見ている世界を見ることができると思います。「子どもの目に、先生の目の高さを合わせて」ということは、「支援や指導の基本のひとつ」と言われますが、それが意味するところは、少し大げさな表現になりますが、「子どもと同じ視点で世界を見よう、同じ感覚で世界を感じよう」というところでしょう。子どもが活動を通して感じる楽しさ

というものを、学生が子どもと同じ視点で同じペースでからだを動かす中で、実際に見て聞いて感じたことが、子どもたちの成長を育むための「よりよい指導や支援につながる」と考えます。

2. 親子防災キャンプ

今年度は自然環境からの学びとして、親子キャンプを実施しました。それも防災というものを活動の中に入れてのもので、屋外での一日の生活を通して、防災というものも考えてみようというところでもあります。親子キャンプのねらいとしては、参加者である親子（+ボランティア）が一日の生活を協力してつくりあげるところにおきました。防災に関係しては、火を起こすことや火をつかっての調理や火の管理といったことを、活動内容のひとつとしました。簡単に火というものが確保できる現代において、火の恩恵というものを考えてみることや、実際に火を身近に扱うことで、火というものがどのようなものであるのかといったことを、活動を通して考えてみようというところでは、実際に火の恩恵を考えると、食材の調理や保存に欠かせないのが火であり、明かりや暖をとることができるのも火というものの存在と、防災ということも含めての適切な火の管理があつてと考えます。

キャンプは、会場を都城にある園の園庭とホールをお借りしての実施となりました。参加者は、大学と協力関係にある学童保育所・子ども園からの呼びかけに応じてくださった親子と、会場とされた園の地域の方々、そして高校生ボランティアの参加にての実施となりました。呼びかけを下された学童保育所・子ども園の先生方を中心に、地域の方々、高校生ボランティアや本校学生、そして参加して下さった親子の皆さんが一体となって、活動をつくりあげていくといった形となりました。

火起こしと炊飯の他、火を使った活動としては、キャンプファイアーも行いました。火起こしや炊飯では、火というものを間近に見ることや、キャンプファイアーでは実際に芋やソーセージを直火で焼いてみることで、それこそ炎の勢いや炎の熱というものを実際に体感するといったことになり

ます。火は私たちに生活での恩恵を与えてくれるとともに、瞬間に生活や、それこそ生命までも奪ってしまうということを学んでおく必要があると考えます。

防災ということでは、ボランティアの参加も多くあったことから、ケガをした時などの三角巾の使い方などをミーティングの時間をつかい講習の機会をつくりました。また、親子はテントでの就寝、ボランティアとスタッフは園のホールで就寝ということもあり、親子も交えて園のホールに段ボールを使っての個別の就寝場所づくりも活動として行いました。防災ということも考えてみようといったキャンプでしたが、活動を通して参加者は、「もしもを考え対策をしておくことが防災」ということを認識できたと考えます。

以上、環境教育センターでの活動から2つを紹介しました。今後も、子どもたちや学生の育みを促せるような環境教育センターの活動を進めていくことができると考えます。